



木象嵌

●新・地域特集

金町地域

●「二代目」の経営

田中英成 「株式会社メニコン代表取締役社長」

危機感が後押しした二代目の大胆な決断

●会社を強くする！実践経営

高級志向で、高齢者の心をつかむ



現代に生かす語りの極意 話上手は商売上手



神田香織

〔講談師〕

かんだ・かおり●1954年生まれ。福島県立磐城女子高校卒業。80年、神田山陽門下生となる。84年、二つ目昇進、以後ジャズや1人芝居の要素を取り入れた独自の世界を確立。講談の可能性を追求する3部作として「剣舞入り講談」「JAZZ講談」「寺山修司作品」を手がける。86年には国立劇場演芸場において「はだしのゲン」を発表。この公演で日本雑学大賞を受賞する。89年、真打ち昇進。著書に「花も嵐も、講談師が語ります。」(七つ森書館)などがある。

とんどいみせんでした。それでも、私がこの世界に入ったのは、二代目神田山陽師匠との出会いがあったからです。

私の出身地は福島県いわき市。関東周辺の一部に、ことばにアクセントを付けない。無アクセント地帯と呼ばれるエリアがあり、いわき市も含まれます。そんな地域で生まれ育った私は、高校卒業後、新劇俳優を目指し、上京して劇団に入りました。ところが、セリフをがんばって言えば言うほど、無アクセントの訛りが出てしまいます。思い悩んでいたときに、勧められたのが講談で、山陽師匠のところに連れていかれました。師匠は「軍社会の講談の世界で女性講談師を育てたい」、また「たとえプロの講談師にならなくても女優も講談の素養を身に付け成功してもらいたい」と、女優の卵を集めて一生懸命講談を教えていたのです。

笑いあり、涙あり、庶民の声を代弁する講談は、日本の三大伝統話芸の一つ。女優を目ざしていた私は、二五年前に講談と出会い、その自己完結、自己実現の世界に魅せられ、飛び込んだ。

声を代弁する話芸です。

講談は五〇〇年以上の歴史があり、落語や浪曲とともに日本の三大伝統話芸の一つです。落語は笑いを提供し、浪曲はふり絞るような声で聞く人の涙を誘います。講談は、笑いあり、涙あり、庶民の

その語り手である講談師は、現在、全国に六〇人。うち半数が女性です。というのも、落語などは喋話もあつて、女性だと、どうしても品が落ちてしまいます。その点、講談は、凛とした歴史話も多く、また、小説や漫画などを素材に自分で話を創作できます。近年、そこにやりがいを見つけて、講談師を自営する女性が増えています。とはいえ、今から二五年前、私が講談の世界に入ったころは、女性講談師はほ

非常に若々しく、背筋を伸ばして出す声に張りがあり、力強くて、思わず正座し、聞きほれました。そのとき、師匠が語ってくださったのは「軍談修羅場」です。テレビもラジオもインターネットも何もない昔、合戦があると、命知らずの者が現場を見に行き、講談にしたてていました。この「軍談修羅場」は講談の基礎です。語るときに、低い声から高い声、弱

い声から強い声、場面や聴衆のようすに合わせながら語っていきます。私はその迫力に圧倒されました。

そんな縁からけいこに通うようになり、一年後、本格的にこの世界に入りました。当時、私はテレビや舞台の仕事も入るようになっていました。でも、芝居は新しい作品のたびに集まっては解散する世界。けれど、講談は自己完結、自己実現の世界です。うまくできれば自分の手柄、失敗すれば自分の責任。いずれにしても非常に達成感があります。これ以上向いている仕事はないと、私は講談界に飛び込みました。

下積みの前座時代は、非常につらいが、気働きを学ぶための期間。将来、一本立ちしたときには、それが財産となり、周囲の人やお客様につねに感謝する心が養われ、芸がより磨かれる。

講師になるためには、つらい下働きの時期があります。落語界なども同じで、芸の世界では、行儀見習いとして最低三年間は前座修業をしなければなりません。報酬は「割り」と呼ばれる日当だけです。「割り」というのは、寄席のオーナーである席亭さんと出演者でお客様の木戸銭を割るからです。今でこそ、講談を聞きに来られるお客様が増えましたが、私

がこの世界に入ったころは「ツばなれ」しない日も多くありました。「ツばなれ」とは寄席のことばで、一つから九つまでは最後に「ツ」が付きます。でも、一〇になると、ツがはなれる。つまり、二ケタになるという意味で、当時は「ツばなれ」せずに出演者のほうがお客様より多いなどということも、しょっちゅうでした。当然、私がいたたく割りも、せいぜい五〇〇〜一〇〇〇円。

一方、修業の身では、先輩たちのお世話や楽屋の清掃、舞台関係などやる仕事は山ほどあります。最初の数か月、私は「冗談じゃないーこんな重労働で、しかも、日当が五〇〇円。お弁当を食べたら、もう帰りの電車賃がないじゃないの!」と、いつも不機嫌で、暗い顔をしていました。ところが、あるとき気がつきました。仕事がすぐに行けるとかできないとかではなく、私が元気に返事をするだけで、周囲の反応や雰囲気が変わる。以後、とにかく返事だけはこやかにするようにしました。不思議なことに、そのうちに下積みの仕事が増えなくなりました。顔の表情一つで、仕事が楽になっていったのです。さらに、仕事を自分で探すようになりました。これが、気働きができるようになったということ。下積み時代が必ず必要なのは、将来、一本立ちしたときに、

人の気持ちが変わらないようでは、まともな仕事はできないからです。寄席では、下働きの時代を通してその大切さを教えるわけです。

そうした感覚が身に付くと、やっと二つ目という身分になります。二つ目は、プロとしてのスタートです。前座を約三年、二つ目を九〜一〇年やって、初めて弟子が取れる真打ちという身分になります。真打ちになれば、自分で新たな話をつくることもでき、自分なりの講談を追求していくことができます。

講談には、発声の基本や聞き手とのかけひき、印象付ける表現など、すばらしいエキスが詰まっています。聞くだけではなく、ぜひ、日常に生かしたい。「気分は講師!」となることで、暮らしが楽しく豊かになる。

私は、講談という話芸をもっともっと多くの方に知っていただきたいと思えます。また、自分のものにして楽しんでもらいたい。

今の世の中、情報は大量に入ってきます。でも、情報をアウトプットする機会がどれだけあるでしょうか。自社の社員にこういうことを伝えたいと思っても、思ったとおりのことが出てこないとき

もままあるでしょう。

重要なものは、まずは、伝えたいものがあるか。そして、伝えたいものがあるのに、表現する方法がまいちピンとこないというときにこそ、講談という話芸のエキスが生きてきます。講談師は、ここぞというところで、一瞬、黙ったりもします。そして、少し間をおいてパッと話し出す。あるいは、お客様たちがざわざわしていたら、あえて小さな声で語り始め、耳をそばだてさせる。いろいろ工夫して、お客様を惹きつけています。

例えば、名刺交換のときも、ただ自分の名前を告げるだけでは、すぐに忘れられてしまいます。であれば、ぜひ、講談式の自己紹介を取り入れていたいただきたい。つまり、最初に「やあ、やあ」と付ける。昔は戦う者同士が「やあ、やあ、遠からん者は音にも聞け、近くは寄って目にも見よ、我こそは〜」と、お互いに名乗りをあげました。この「やあ、やあ」を言うとき、講談式では、「あ」のほうに力を入れます。「つつこみ」といいますが、「やあ、やあ」と声を出せば、おなかの底から声が出て、強く自分を印象付けられます。

あるいは、道を聞かれたときに、講談式で教える。講談では、左は「ひんだり」、右は「みざり」と言います。下に「り」をつけることはが強くなり、勢い

や華やかさが出るからです。道を聞かれたときには、ぜひ、この「ひんだり」「みざり」を使ってください。「千葉商工会議所は、どちらですか?」と聞かれたならば、「その道をひんだりに曲がり、次をみざりへ進んで」と。それだけで、カッコよく聞こえるはずですよ。

はたまた、美人を表現するときの「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」ということはご存じだと思います。講談では、それだけでは終わりません。もつとオーバーに表現し、このことばの前に「沈魚、落雁、閉月、羞花」と付けます。その美しさのために、魚が沈み、雁が落ちて、月が隠れ、花まで羞じらうという意味です。そして、「立てば芍薬」の後には「見ぬ唐土の楊貴妃か、普賢菩薩の再来か、静御前か、袈裟御前、はたまた、神田かおりちゃん」と。この「神田かおりちゃん」のところが自分の奥様の名前に変える(笑)。日本の男性は、口下手の方が多く、奥様にはあまりリップサービスをしていません。そういう積み重ねが誤解を生みます。ぜひ、奥様の誕生日やクリスマスに、そう言っておきましょう。

このように、ことばの意味を尊重し、大きく華やかに語るのも講談という話芸のエキスです。もちろん相手を見ての話ですが、そんなエキスを日常にちょっと投

入するだけで、気分は講談師となります。また、発声の基本は、丹田に力を入れること。肩幅ぐらいに足を開いて立ち、丹田にグツと力を入れ、二〇mぐらい先に向かって、短く、高く、強く、地声で「あ」と出してみる。毎朝、庭やベランダへ出て、「あ、あ、あ……」とやるだけで、気持ちが良いはずですよ。ちょっとぐらい悩みがあっても、空を見上げて声を出せばパワーが出てきます。

不思議なもので、そうした発声を続けていると、性格も変わってきます。私は女優になるところか、説りばかり出て、自信がなく、暗くて、いつでも投げやりになるような性格でした。それが講談と出会い、人様の前で話っているうちに、別人のような性格になりました。毎日、声をおなかから出すことで、気持ちも前向きになっていきます。継続は力なり、です。ぜひ、実践してください。

昔からの話芸は、生かされてこそその話芸です。過去のものとしておくだけではもったいなさすぎます。発声や聞き手とのかけひき、表現など、五〇〇年の伝統を持つ話芸——講談の良いところをお仕事に生かしていただけましたら、本当にうれしゅうございます。

〔6年10月10日に行われた「ちばぎん総研公開講演会」における講演の抄録〕